

第5章

明治以降の木曽檜活用、森林鉄道

じんぐうびりん

神宮備林



かつて、宮内省御料局木曽支庁(1905設置)が、伊勢神宮^{しきねんせんぐう}の式年遷宮用のヒノキを確保、育成を目的とした林、および指定された地域です。現在の長野県木曽郡と岐阜県中津川市の阿寺山地にあります。

伊勢神宮の神宮林の備え(予備)という事から名づけられました。現在は神宮備林という名ではなく、国有林の一部の扱いです。しかし、旧神宮備林、神宮備林、旧御料林、御料林などの名称でも呼ばれています。



御杣始祭 伐採



三紐切り



三紐切り

しきねんせんぐう

伊勢神宮の式年遷宮

「式年」は年数の限りという意味で、伊勢神宮に限らず他の神社でも20年を区切りとして社殿を中心として造り代えてきました。この祭祀制度が21世紀まで続いているのは、皇室の祖神とされている伊勢神宮だけとなっています。

伊勢神宮の式年遷宮の記録が残っているのは、七世紀後半の白鳳時代の天武天皇の頃とされています。奈良・平安・鎌倉時代まで伊勢神宮所有の宮山、宮域から御造営材を出していましたが、やがて、材がなくなり室町時代の1345年（興国6）頃から他国の山から御造営材を出すようになりました。

伊勢神宮（正式名称「神宮」）は、内宮と外宮から成り、20年に一度「式年遷宮」を執り行います。この式年遷宮では新たに神殿を立て替えて御神体を移します。伊勢神宮の遷宮は様々な行事を要し、これまで62回、約1,300年にわたって連綿と伝えられてきた日本の伝統文化です。

この遷宮に使用される木材のうち、御神体を収めるための器となる材は「御樋代木」といわれ、この御樋代木をとる木材が「御神木」と呼ばれます。御神体に最も近づく御神木の伐採には、「御杣始祭」と呼ばれる特別な行事が行われます。



御木曳行事

御神木は、内宮と外宮の2本を必要とし、それぞれが無節の上質な材であること、清らかな流れに近い清浄な土地にあることなど、数多くの要件を満たさなくてはなりません。また、伐採では2本の先端が交差するように倒すため、お互いが届く距離に生えていなくてはなりません。

数多い要件を満たして選ばれた御神木は、三ツ紐切り（又は三ツ尾切り）といわれる伝統的な手法で伐倒されます。木の幹に三方向から斧を入れ、3箇所のアツルを残して伐倒することで、木材を傷めず、倒す方向も決めやすいという古来の技術です。

伐倒された御神木は、先端を菊の十六紋にかたどり、南方面などに文字を彫り込む作業が行われます。上松駅前では、御神木を奉安し芸能祭が奉納されたり、奉曳車に乗せられた御神木を地元住民などが参加する御木曳行事も行われます。この行事が終わると伊勢神宮に運ばれていくことになります。これを「御奉送」と呼び、御神木が立ち寄る各地域でも神事や祭礼が開催されます。

神宮備林と御料局木曾支庁

かつて尾張藩の管轄であった木曾の山林は、明治維新後に政府へと引き継がれ大部分は「官林」となりました。しかし1889年(明治22)に皇室財産の「御料林」に編入されたため、木曾福島に新たに置かれた宮内省御料局木曾支庁(1903年設置)が管理運営を担いました。1906年(明治39)に御料林の一部が「神宮備林」となってからはその管理も行い、1920年(大正9)6月3日に第58回御^{きもとさい}杣山木本祭(翌59回からは御^{みそまはじめさい}杣始祭に名称変更)では、上松町の台ヶ峰打越沢から御神木を伐り出しました。

御料局木曾支庁庁舎(1908年から機構変更により宮内省帝室林野管理局)は、大正時代末まで執務に使用されましたが、1927年(昭和2)の福島大火で焼失したため、残念ながら当時の写真が残るのみです。



御料局木曾支庁庁舎(明治時代)

国有林の時代

1947年(昭和22)に、林政統一が行われ、木曾の森林は国有林となりました。

現在も、木曾谷から式年遷宮で使われる御用材を伐り出しております。

1985年(昭和60)には小川入国有林98林班で、2005年(平成17)には小川入国有林80林班で「御^{みそまはじめさい}杣始祭」を行いました。

御杣始祭は、式年遷宮の祭典の一つで、伊勢神宮の御神体を安置する器を造る、御^{みひしろ}樋代木を伐採する儀式です。御杣始祭で伐られた御神木は、化粧がけをし、長さ6.6mに伐られ、赤沢から上松駅まで運ばれ御木^{おきひ}曳きが行われます。その後、御神木は木曾川に沿って伊勢まで運ばれます。



神宮美林

あかざわしぜんきゆうようりん

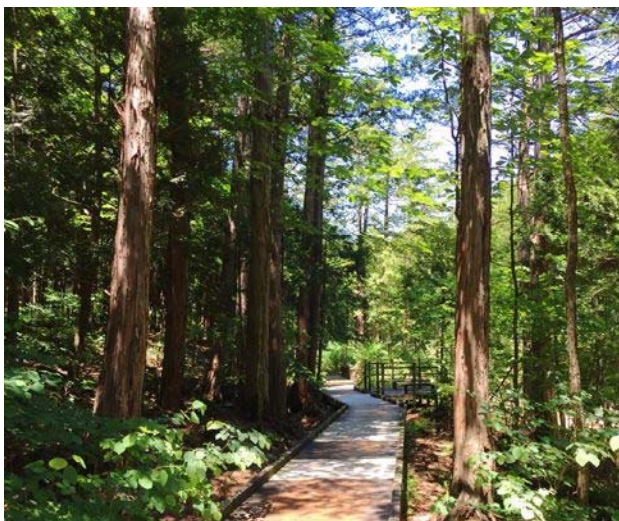
赤沢自然休養林

■基本データ

- 住所 上松町小川入国有林内
- アクセス JR「上松駅」から県道473号線を西に15km。路線バスで約30分。塩尻IC、中津川ICから90分、伊那ICから80分。
- 面積 740ha 標高 1,080~1,558m
- 開園期間 4月下旬~11月上旬
- 連絡先 赤沢自然休養林総合案内(上松町観光協会、上松観光開発(有)) / TEL 0264-52-1133
上松町教育委員会 / TEL 0264-52-2111



マップQR



敷地内には日本森林学会が選定する「日本林業遺産」に認定された木曾森林鉄道(1975年運行終了)の保存施設、森林鉄道記念館があります。観光路線として、森林鉄道記念館-丸山渡(往復2.2 km)が運行され、乗車しながら赤沢の美林を見学できます。

赤沢自然休養林は、上松町の南西部に広がる林野庁管轄の国有林で針葉樹林です。樹齢300年以上の天然木曾ヒノキが林立していますが、原生林ではありません。

面積は759.56ヘクタール、標高は駐車場付近の1,080mから、1,558mに至ります。

付随する公園地の名称でもあります。もともとは伊勢神宮などの御神木・建築用材を産出する森林地でした。

古来から檜などの良質な木材を産出し、伊勢神宮の式年遷宮の際にはここから選定されたご神木が用いられます。

日本三大美林のひとつで、林野庁の「森林セラピー基地」にも指定されています。観光客向けに整備されており、快適に自然環境を楽しむことから、都会から多くの観光客が訪れます。

木曾木材の中心地である上松町のみならず、木曾路を代表する体験型施設として、広大な敷地内に、整備された歩道を歩き森林浴を楽しむ8つの散策コース、森林セラピー体験施設などを備えています。

林業を支えた森林鉄道を体感



赤沢森林鉄道記念館

「赤沢森林鉄道記念館」は、森林鉄道の起点にあります。当時活躍したアメリカ製ボールドウィン蒸気機関車の1号機を始め、貴賓車、理髪車、モーターカーなどが見学できるほか、現役時代の写真も展示されています。また、運がよければ運行している機関車の整備を間近に見られます。廃止された鉄道路線の一部が復活されており、当時の車両で運行している赤沢森林鉄道に体験乗車することも可能です。

長野県木曾郡上松町小川入国有林内 赤沢自然休養林
営業時間9:00~16:00(休日荒天日、11月~4月は冬季休業)
料金資料館入館無料、普通車600円、赤沢森林鉄道乗車体験
往復2.2 km 1便当たり5両・定員100名
大人800円
4歳~小学生500円、団体割引(15名以上)あり
TEL0264-52-1133(上松町観光協会)

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

構成文化財④

建造物

きゅうていしつりんやきよくきそしきよくちょうしゃ

旧帝室林野局木曾支局庁舎

■基本データ

住所 木曾郡木曾町福島5471-1

アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩約25分、
伊那ICから約40分(30km)

連絡先 木曾町教育委員会生涯学習課／TEL 0264-23-2070
管理人室直通／TEL 0264-23-2033

指定 町有形文化財(2012年)



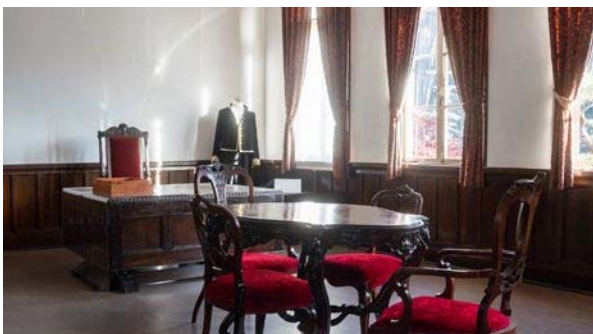
マップQR



福島大火で焼失した庁舎の代わりに、1927年(昭和2)に現地で再建されたのが現在まで残る帝室林野局木曾支局庁舎です。この庁舎を中核として木曾ヒノキを基軸に森林鉄道等による御料林としての近代的経営が行われ、1947年(昭和22)以降は現在の林野庁へと引き継がれました。先代の焼失からわずか半年で建てられた庁舎ですが、^{しょうしや}瀟洒な佇まいは木曾山の歴史と皇室の威光を今に伝えています。

旧帝室林野局木曾支局庁舎は、木造の本館、鉄筋コンクリート造の倉庫、汽缶(ボイラー)室が一体として残っています。全体としても近代の林野行政を知る上で貴重な建築です。

建築様式を知る上でもアール・デコの意匠がみられ、さらに、設計図面・棟札等が残っており、多数の名建築を輩出した宮内省内匠寮の設計で、請負が東京の業者であることが分かる資料もあります。



木曾の森林文化を長く伝えられる文化施設として、また木曾町内の近代化遺産としての重要な位置付けが明確となっていくことから貴重な文化遺産です。木曾町ではこの貴重な建物を2010年(平成22)に取得し、町のシンボルとして復元改修を行いました。

そして2014年(平成26)に一般公開を開始し、4年後に林業遺産の認定を受けました。御料林の歴史を後世に伝え、観光交流等に活用する「愛称:御料館」として、多くの来訪者を迎えています。

御料館

1階には幅広い世代にも親しめるように「木育ルーム」を設置。県産材の良質な「ひのきのおうち」ほか、様々な木のおもちゃで自由に遊ぶことができ人気のスポットです。

2階の展示室では明治13年の「木曾谷模型」を展示しています。作者は御嶽行者で布教に尽力した児野嘉左衛門(ちごのかざえもん)です。内務省山林局木曾出張所が発注し、東京上野の第二回内国勸業博覧会に出品されました。周囲13mの巨大なジオラマで木曾谷全体を立体的に表しています。材料は天然木曾ヒノキです。



塩尻市・木祖村・木曾町・王滝村・上松町・大桑村・南木曾町・中津川市

きそのしんりんてつどう

木曾の森林鉄道

■基本データ

- 住所 上松町小川入国有林内
 アクセス JR「上松駅」から
 県道473号線を西に15km。路線バスで約30分。
 塩尻IC、中津川ICから90分、伊那ICから80分。
 開園期間 4月下旬～11月上旬
 連絡先 上松町観光協会／TEL 0264-52-1133
 上松町教育委員会／TEL 0264-52-2111

木曾森林鉄道の歴史

木曾森林鉄道は、大正初期から1975年(昭和50)まで、木曾地方で運用されていた森林鉄道の総称です。木曾ヒノキをはじめとする木材の搬出に用いられ、歴史と規模の大きさ等から、国内の森林鉄道の代表的存在でした。

1900年初頭、日本各地で鉄道網が整備されていきました。木曾郡内でも国鉄中央線が名古屋から塩尻までを結び、近代化の波が訪れていました。そんな時代の中、これまで河川を利用して運材は、水力発電所の建設により行えなくなり、木曾の木材もまた鉄道を利用して輸送されるようになりました。

1909年(明治42)、上松駅を起点とする森林鉄道小川線の工事が着工。1916年(大正5)、本格的な機関車と軌道を用いた森林鉄道「小川線」が開通します。上松と赤沢を結んだ小川線は木曾森林鉄道活躍の幕開けでした。

以降、王滝線、阿寺線、小木曾線、西野川線などつぎつぎとレールが敷かれていきます。



王滝の森林鉄道

最も長距離で輸送力が大きく、木曾谷はもとより日本の森林鉄道の代表的存在として語られるのが王滝森林鉄道です。王滝線の建設は帝室林野局によって1917年(大正6)に着工されました。鬼淵停車場を起点に王滝川に沿って水ヶ瀬までの25.3kmが開通したのをきっかけに、以降、御嶽山南麓の三浦までの幹線約16.7kmの延長、さらに瀬戸川、うぐい川、滝越から分岐する各支線も合わせて、王滝、三岳、開田の3村にまたがる広大な御料林内の鉄道網が1930年(昭和5)までに完成しました。



写真提供：中村秀己氏

機関車には、アメリカ製の蒸気機関車ボールドウィン号が活躍し、大正・昭和には最新のディーゼル機関車、ガソリン機関車が導入され、木曾の森林鉄道の全盛期の昭和30年代には、木曾谷全体で幹線・支線併せて57路線、総延長は428kmを数え、作業軌道を入れると500kmともいわれています。これは東海道本線東京～関ヶ原と同距離に匹敵します。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)第7章
その他
(観光宣伝など)

滝越地区(たきごしちく)

長野県最西端の滝越地区は木曽森林鉄道の中で一番奥の集落です。美しい緑と豊かな水、釣りやカヌーが楽しめるスポットとしても知られていますが、水交園に滝越の暮らしを支えたやまばと号とロータリー除雪車が展示されています。

やまばと号は滝越地区にあった分校が1959年(昭和34)に廃校となった為、本校まで通学

するのに1975年(昭和50)まで運行していたスクール列車でした。中は床も壁も木で作られており、可愛らしい子供サイズのイスが並んでいます。

鉄道のレールがいたるところに残っている滝越は、森林鉄道ファンの中でもとても特別なものとなっています。

松原スポーツ公園の保存車両

住所:木曽郡王滝村



モーターカー4号機



ディーゼル機関車132号機

滝越の水交園の保存車両

住所:木曽郡王滝村滝越5005



ディーゼル機関車119号機



関西電力ロータリー式除雪機

森林鉄道の保存車両展示、見学することができます。

「りんてつ倶楽部」によるレストア、ボランティア保存活動

1991年から毎年5月～11月の月に1度(年に5～6回)、旧松原停車場付近にある松原スポーツ公園内でレストア活動を行っています。王滝村内の保存車両もレストア増備しつつあり、今後の継続とエンドレスの線路を敷設。蒸気機関車“ボールドウィン”を走らせる目標で活動しています。

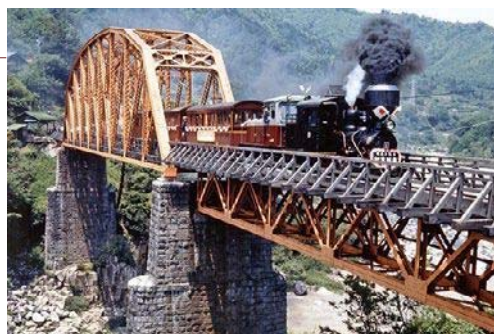


やまばと号用(7t)機関車

保存車両の写真提供:高橋滋氏

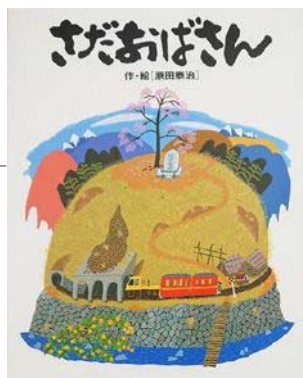
鬼淵鉄橋(おにぶちてつきょう)

木曽郡上松町にある「鬼淵鉄橋」は、全長が93.8mあり、1913年(大正2)に小川森林鉄道が着工されたときに作られてから1975年(昭和50)まで、森林鉄道の鉄橋として使われました。王滝森林鉄道は、日本で最後まで運行された路線で、最終列車では鬼淵鉄橋の上でフィナーレが行われました。また、鬼淵鉄橋は、森林鉄道の橋としては日本最古、最大規模、構造材は輸入品ではなく八幡製鉄所で生産された国産の鋼材であり、それを用いて日本人の土木技師三根奇能夫(1880～1950)が設計し完成させた純国産第一号のトラス橋と言われています。まさに知られざる名橋。森林鉄道が消えてしまった今、計り知れない意義を持つ文化遺産といえます。



王滝森林鉄道を描いた原田泰治の絵本

王滝森林鉄道が廃線になる前年の1974年(昭和49)、日本の原風景を描く画家、原田泰治が木曽谷を訪れました。実際に王滝森林鉄道に乗り、その取材をもとに創作された絵本が「さだおばさん」です。村人に愛された行商のおばさんと王滝森林鉄道の心あたたまる物語です。



講談社刊

電力王・福沢桃介の偉業達成の地

木祖村で雪解け水を集めて、一筋の流れとなった木曾川は、岐阜県境の手前で西へと流れを変え、変化に富んだ景観を現出します。この両県境にまたがる一帯は、電力王と呼ばれた福沢桃介が、壮大な夢を描き、日本の電力業のみならず、広く産業界を発展させるまでのサクセスストーリーの舞台となった場所です。

1868年(明治元)、維新の幕開けとともに生まれた福沢桃介は、慶應義塾大学在学中に福沢諭吉の養子となり、卒業後にアメリカへ留学。その後、31歳のときに利根川水力電気株式会社の発起人となり、42歳で木曾川での発電事業に着手します。

桃介橋(ももすけばし) 国重要文化財/国近代化遺産

この一帯で最も目を引くのが、電力王の名を冠した桃介橋です。1922年(大正11)9月に完成。木曾川の水力発電開発に力を注いだ大同電力が読書発電所(1923年完成)建設の資材運搬路として架けたものです。

全長 247m、幅2.7mで、三本の主塔と高い木製のトラスを備えたデザインが印象的で、木製の吊り橋としては日本有数の長大橋。中央を支える大階段から中洲に下りられるような工夫もあります。

一時は老朽化による廃橋の危機もありましたが、地域住民から保存の声があがり、1993年(平成5)に修復され生活道路として活躍する現役の橋です。国道19号から桃介橋を渡ると天白公園があり、モダンな洋館が見えます。洋館は桃介と貞奴が過ごした別荘で、現在は記念館として公開されています。



桃介橋

当時は、近代化に向け日本の産業界が一気に加速を遂げた時代で、動力源としての電力への期待も高まりつつありました。

そこで桃介は、水量が豊富で落差の大きな木曾川に目を付け、1919年(大正8)に竣工した賤母(しずも)発電所を皮切りに、わずか7年間で7つもの発電所を完成させました。桃介はまた、日本の女優第一号の川上貞奴さだやっことのロマンスでも知られます。二人はしばしば南木曾町にある別荘に長期逗留していました。

木曾川開発について、桃介が語ったこと

「木曾川は、上流に貯水池が出来る。途中非常な急勾配があつて水路式発電所が出来る。一番終ひにはダムが出来る。御料林であるから水源は千古に尽きない。而も大阪名古屋のマーケットに近い。恐らく日本の水力地点として、これに越すものはなからう。これを擇んだのは私の卓見で大成功と言へるが、工事を始めるとなると無鉄砲に早くやって、矢張り株主に迷惑をかけたやうなことで、功罪相償って差引き何も残つておはしない。」

—『福沢桃介翁伝』

読書(よみかき)発電所 国重要文化財

桃介橋の下流には、桃介が1923年(大正12)に完成させた読書発電所があります。水路式発電所として完成当時は国内最大出力を誇り、半円形の窓やレリーフをしつらえた本館は文化的価値が認められ、平成6年に国の重要文化財に指定されました。これは発電施設として、また稼働中の施設としては初の指定でした。同時に指定された柿其水路橋は、桃介橋から5kmほど上流の柿其川に架かるコンクリートの迫力あるアーチ橋で、上部に水路を渡しています。読書発電所へ水を運ぶために造られ、現存する第二次世界大戦前の水路橋の中では最大級だとか。ここでもまた、桃介の夢の大きさに会うことができます。



読書発電所



柿其水路橋

第6章

木曾の暮らし、
風土、宗教(御嶽山信仰)



木曾の食文化 木曾の伝統料理・郷土食

2013年(平成25)12月、ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食;日本人の伝統的な食文化」。現在では、「海外における日本食レストランの増加」や「訪日外国人観光客からの郷土料理を食べることへの期待」など、世界からも和食は注目されています。

農林水産省では、2019年(令和元)「うちの郷土料理～次世代に伝えたい大切な味～」全国の郷土料理の調査と郷土料理のいわれ・歴史やレシピ等、また、郷土料理を生んだ地域の背景等を次世代に継承する目的でデータベース化が推進されています。



構成文化財③7 食文化 木曾地域全般

てうちそば 手打ちそば

■基本データ
指定 県選択無形民俗文化財

冷涼な気候で、米や小麦が栽培しづらい高冷地の農産物として育てられてきたのが「そば」でした。朝霧のかかるような高冷地では、霜に弱い蕎麦を霧がやさしく守ってくれるため美味しいそばができます。そば切り(細い麺状のそば)発祥の地としても有名で、一本棒・丸伸ばしという古くから伝わるそば打ち方法です。

日本遺産木曾路 構成文化財

③蕎麦切り発祥の里……………2章-27P参照

そばの歴史

定勝寺の古文書、番匠作事日記・1573年～1577年(天正元～天正5年)に「振舞ソバキリ」金永、「ソバフクロツ千淡内」ほかに強飯(おこわ)、清酒、豆腐、白米など記されています。大桑村の定勝寺の仏殿修理工事にそば切りを振る舞ったという記録が残っています。これは歴史的に一番古い史実とされています。

1706年(宝永3)の「風俗文選」によると、本山宿から「そば切り」は全国各地へ広まったとされています。また御嶽山修験者の携帯食として重宝された「そば」は開田高原の特産品でした。

すんきそば

「すんき漬け」を温かいそばの上に乗せたものが、すんきそば。

そばつゆの出汁、そばの旨味、すんき漬けの酸味と旨味が絶妙に絡み合った、木曽地方ならではの昔から食べられている郷土料理です。



木曽地方に古くから伝わる郷土そば、「すんきそば」



「とうじそば」

開田高原「とうじそば」

開田高原では「とうじそば」という独特の食べ方の蕎麦があります。御嶽山麓の寒村で昔から来客に振る舞われたお蕎麦です。具とつゆが入ったお鍋に、とうじ籠に入れた蕎麦をひたし、蕎麦を温めて食べます。鍋にくぐらせて食べるもので、風情があります。

すんきづけ

すんき漬け

■基本データ

発祥	木曾地方
成立時期	未詳
指定	県選択無形民俗文化財「長野県味の文化財」(1983年) インターナショナルスローフード協会「味の箱舟」(2007年) 農林水産省「地理的表示保護制度(GI)」に 「すんき」として登録(2018年)

赤カブの葉を塩を使わずに乳酸発酵させて作る木曾地方の伝統的な漬けものです。通常の漬けものは塩漬けした後に乳酸発酵させるものがほとんどですが、木曾地方では「米は貸しても塩は貸すな」といわれるほど塩が貴重だったため、乳酸発酵のみで作られました。

すっきりとした酸味があり、単に「すんき」ともいわれます。カブ菜の豊富な繊維質による整腸作用によって、便秘が解消され、美肌効果をもたらすといわれ、植物由来の生きた乳酸菌発酵食品であり、健康栄養食品として注目されています。

原料となる赤カブには、王滝村の王滝カブ、木曾町開田の開田カブ、木曾町三岳の三岳黒瀬カブ、上松町の吉野カブ・^{あじま}芦島カブ、木祖村の細島カブと6種あり、いずれも信州の伝統野菜に認定されています。

すんき漬けは、冬季限定の漬けもので秋の終わり頃から冬にかけてつくられます。かぶ菜は寒くなるとおいしくなり、乳酸菌が活動しやすいといわれることから、霜が降りるのを待ってから収穫します。数十年前は、囲炉裏のまわりですんきを仕込み、寒さが厳しい木曾地域では、凍ったすんきを桶から取り出して食べていました。



木曾町あげての地域おこしに活用

木曾町は2011年(平成23)、「すんき」に代表される木曾の地域資源を科学的に研究、その資源を活かした地域産業を研究するため、御料館(旧皇室林野局庁舎)内に地域資源研究所を立ち上げました。すんき乳酸菌の保護、すんきから分離される乳酸菌を中心にした素材研究、各種企業を通じて商品開発を行っています。

すんきを活かした商品としては、乳飲料やドレッシングなどが開発されています。

世界的な評価

すんきと材料である赤カブが2007年、イタリアに本部がある「インターナショナルスローフード協会」より、「味の箱舟」に認定されました。「味の箱舟」とは、世界各地で消滅の危機にある優良な食品を記録し、味覚を再発見すると同時に未来へ届けていくという食の遺産のことをいいます。日本では15品目目にあたります。

基本的な作り方

赤カブの葉を長いまま、あるいは刻んで熱湯につけた後、「種すんき」といわれるすんきを入れて、乳酸発酵させます。種すんきには、乾燥すんき、冷凍すんき、すんきの漬け汁のほか、ヤマブドウ、ズミ、ヤマナシなどの果実を叩いてつぶし、発酵させたものなどが単独、または併用して使われます。

乳酸発酵には温度管理が非常に重要なので、保温性のある木桶を使うか、ポリ桶の場合は新聞紙や風呂敷などで保温します。加温しすぎると、腐ってしまい、保温が弱いと乳酸発酵せずに酸味が生まれません。

8月頃に播種、10月下旬から11月上旬に収穫し、その後漬けこみ、2月下旬頃までに食べ頃となります。

- ①赤カブのカブの部分を取り、茎と葉を洗って水気を切り、さつと茹でます。カブは酢漬けにし、株の根元は刻んで茎菜とともに茹でます。
- ②桶の中に湯通ししたカブ菜とすんき種を交互に加えます。
- ③最後に手で押し込み、桶のまわりを新聞紙や風呂敷などで包み、一晩おきます。
- ④翌日、べっこう色になっていたら、成功。
- ⑤冷暗所に置いて、1週間位後から食べられます。

き その ほ お ば ま き

木曾の朴葉巻

■基本データ

発祥 木曾地方

成立時期 平安末期

指定 県選択無形民俗文化財(2001年)

木曾地域の名物の一つで、古くから子供の成長を祈り、端午の節句(木曾地域ではひと月遅れの6月5日)の祝いの日につくります。

「朴葉巻」は、米の粉に熱湯を入れてよくこね、中にあんを入れて、朴の葉で包んで蒸したもので、「木曾の朴葉巻」として長野県選択無形民俗文化財に指定されています。

端午の節句といえば柏餅ですが、標高が高い木曾地域には柏の木がなく、代わりに、朴の葉を使うようになりました。

昔からそれぞれの家庭には朴の木があり、6月初旬頃になると、朴の若葉が伸びて大きく広がるので、ものを包むのに適するようになります。小枝の先に5、6枚の葉がついており、切らずに繋げたまま1枚毎に餅を包みます。

餅の中には、小豆あんやつぶしあんを入れ、新しい井草や藁を用いて葉をしぼります。蒸しあがった朴葉巻は、さわやかな若葉の移り香が特徴的な祝い餅です。

今では、ゆず味噌あん、白みそ胡桃^{くるみ}あんなどもあり、各家庭や店で工夫され、町中のあちこちの店でも「朴葉巻」がたくさん並び、木曾地域独自の初夏の風物詩となっています。



朴葉巻の歴史

朴葉巻の由来は、平安末期に信濃源氏の一族だった木曾義仲の時代に、戦に出る際に朴の葉を利用して味噌や米を包んだのが始まりだといわれています。

また、読み方については木曾地域でも「ほおば」と「ほうば」に分かれるところですが、学術的な送り仮名は「ほおば」で、発音は「ほうば」が一般的のようです。

朴の木は、モクレン科の落葉高木で、山地で見られる樹木の中で、最も大きい葉と花を付けます。大きい葉は長さ40cm、巾25cmもあり、朴葉は防腐効果をもつことから古くから食べ物を包むことにも使われていました。

「朴葉メシ」、「朴葉寿司」、「朴葉味噌」など朴の葉を利活用した伝統料理が数多く残されています。いずれの料理も、朴の葉の香りが食欲をそそります。



6月頃の朴葉の若葉

ごへいもち 五平餅

食文化

木曾・伊那地域のほか、岐阜県、
富山県、愛知県、
静岡県などの中部地方

■基本データ

成立時期 江戸時代中期頃には既にあった

指定 県選択無形民俗文化財(1983年)



奈良井宿独特な形をした五平餅
ゴマとみそで仕上げた味噌だれ味

五平餅は、半搗きにしたうるち米を串に刺し、味噌や醤油ベースのタレをつけて焼いたもので、木曾・伊那地域のほか、岐阜県、富山県、愛知県、静岡県などの中部地方の山間部に伝わる郷土料理です。

様々な形のものがあり、「わらじ型」「小判型」「筒型」「団子状」など細かく分けると10種類ほどあるといわれています。由来は、形が神道の祭祀で捧げられる「御幣」に似せて供えた、五平(若しくは、五兵衛)という人物が飯を潰して味噌をつけて食べた、約400年前に美濃の国から飯田へ峠越えして来た老人が伝授した、その老人の名が「五平」だったなど様々な説があります。



上松町の五平餅 小判型で味噌だれ

五平餅の歴史

起源は明らかではありませんが、江戸時代中期頃には既にあったといわれています。

五平餅文化は、「塩の道」沿いに分布しており、塩尻市が境目となっています。北信地域はおやき文化が根付いており、五平餅は木曾地域や南信地域を中心に食べられています。伊那地域は暖かく竹藪が多いため、米を刺す串は竹串を使うことが一般的です。

木曾地域では、以前は木曾五木のヒノキの串を使っていたといわれており、自然環境の相違がそこから窺えます。

昔は米が貴重だったため五平餅はハレの日の料理として食べていたもので、当時は、五平餅は大変なご馳走でした。あまりに美味しくて「1人で5合は食べてしまう」という意味で、その美味しさを「五平五合」と表します。



木曾地域ではヒノキの串が使われることが多かった
味噌を塗って焼いた団子状の五平餅

タレは、各地域や家庭によって様々ですが、醤油・味噌ベースのタレをぬったり、季節によって、ごま、山椒、柚子などを加えたりもします。信州の特産品である胡桃をすりつぶしてつくる「胡桃味噌」は代表的な味で、素朴な味付けが信州らしい一品です。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

おおびら(大平)

食文化

■基本データ

発祥 木曾地方

成立時期 江戸時代中期頃には既にあった

昔から宿場の料理として食べられ、冠婚葬祭などの際に大鍋で作られ振る舞われてきた郷土料理です。

「おおびら」とは「大平」とも書きますが「大平」すなわち「大いなる大地」を意味し、大地の恵みである数種類の野菜を集めて煮込んだものと解釈されています。

鶏肉、里芋、しいたけ、こんにゃく、人参、大根、しらたき、ごぼう、油揚げ、ちくわなどを用いて作られる煮込み料理の一つで、乱切りや角切りにした具材を鰹節や昆布の出汁で煮込み、醤油、酒などで調味します。



祝い事の際には末広がりの形に切る三角形、仏事の際には四角に切り赤い人参を入れるなど、祝い事、仏事により材料の切り方が変わります。

笹巻き

食文化

■基本データ

発祥 木曾地方

成立時期 江戸時代中期頃には既にあった

いわゆる笹団子で、細長い団子にくるみやあんこが入っている素朴なお菓子です。

道の駅木曾福島では地元のおばあちゃん達手作りの「笹っ子」がお土産に人気です。



みたけずし

食文化

三岳寿司

■基本データ

発祥 木曾郡木曾町三岳地区
成立時期 大正時代

「三岳寿司」は、鮭、大根、人参を糍と塩・酢・砂糖で漬け込んだ発酵食品です。木曾町三岳地区の郷土料理で、年末に作ってお正月に食べるごちそうです。

三岳寿司の始まりは、大正時代と言われています。木曾町三岳は、霊峰御嶽山の麓の村。御嶽山を信仰する人々が全国から登拝のために集まり、その際のおもてなし料理の1つが、この三岳寿司だったそうです。

イタドリ

食文化

■基本データ

発祥 木曾郡南木曾町
成立時期 不明

南木曾でイタドリを食べるようになったのは、南木曾に根づいた、ろくろ細工の職人である木地師たちが始まりです。

良材を求めて山を転々として歩いていた木地師は、いたどりをはじめ、さまざまな山菜を加工して美味しく食べる名人でもありました。

それから半世紀ほど経つうちに、だんだんとその新鮮な食感や美味しい食べ方が知られるようになり、土地に根づいた食材となっていました。

イタドリは、漢字で書くと「虎杖」。茎に「虎」の毛皮のような模様が現れること、大きくなると「杖」にしても丈夫なくらいであることから、この名前があるそうです。イタドリの若葉を摘んで傷口に当てると血が止まり、痛みが取れるので「痛み取り」からイタドリの名前がついたとも言われています。

イタドリの別名や方言はものの本によると500以上もあるとか。スカンポ、サシボ、ゴンパチなど、それだけ昔から親しまれてきた植物なのでしょう。

特に、春4～5月に採取できる柔らかい新芽は、煮物や炒めものにして美味しくいただけます。

まんねんすし

王滝村の万年鮓

■基本データ

- 発祥 木曽郡王滝村一円
- 成立時期 未詳
- 指定 県選択無形民俗文化財(2000年)



王滝村の万年鮓 写真王滝村教育委員会

長野県伝統的郷土料理 王滝村の行事食・ハレの食

王滝村の万年鮓は山の中ならではの食材岩魚を使った馴れ鮓です。正月料理・行事食として発達しました。

岩魚(他の川魚でもよい)の内臓を取り、多量の塩で漬け込み、食べる1ヶ月前に塩出し、酢飯を詰め、樽の中に重ね並べ重石を置いて発酵させて作ります。

その他の郷土食

朴葉寿司

田植えの時に香りが良くなる朴葉には殺菌効果があり、身近な材料で作ることができるので、忙しい田植え時のお弁当にも使われました。

木曽谷と下伊那南部の山村では、朴葉飯、朴葉強飯、朴葉結び、朴葉寿司、朴葉巻などがつくられました。

木曽の地酒

木曽路では古くから酒造りの文化があり、4カ所の酒蔵があります。なかでも「木曽路」「七笑」「中乗さん」「木曽のかけはし」は木曽を代表する地酒です。また、木曽のどぶろく特区で造られた「木一」「駒の夕映え」「男滝」「女滝」も木曽らしい逸品といえます。

あかたつ

信州の伝統野菜に認定された、南木曽特産の赤茎里芋の茎の漬物です。明治時代には栽培されており、中京方面から伝播したと思われ、現在は木曽、上下伊那で栽培されています。茎が赤紫色の唐芋の葉柄を塩漬けや酢漬けにして食用にしています。皮をむき、塩漬けした後、甘酢や調味液で漬け、しょうが汁をかけて食べます。地元では産後見舞い品として使われています。島崎藤村の小説「家」に「あかたつ漬け」の記載が見られます。

そまびとじる 杣人汁

山で木を切る人(杣人)が、山で暖をとりながら食べた料理です。現在は入れる具も多くなりましたが、そば粉と山のキノコが主体の汁物です。

御嶽山とその信仰

きそおんたけさん

木曾御嶽山

王滝村

木曾町

■基本データ

- 標高 最高峰 剣ヶ峰 3,067m
- 所在地 木曾郡木曾町・王滝村、岐阜県下呂市・高山市
- 種類 成層火山



木曾御嶽山(御岳山とも表記される)は標

高3,067mの独立峰。北から^{ままとだけ}継子岳(2,859m)、^{まりしてん}摩利支天(2,959m)、^{ままはだけ}継母岳(2,867m)、^{けんが}剣ヶ^{みね}峰(3,067m)、王滝頂上(2,936m)。

登山口は、JR木曾福島駅を起点に長野県側には、黒沢・王滝・開田の3つがあります。

剣ヶ峰が頂上とされ、御嶽神社奥社が^{まつ}祀られています。山頂部には一から五までの火山湖があり、総称して「五峰五池」とも呼ばれます。二の池は日本最高所にある湖と言われ、四の池周辺は高山植物の宝庫と言われています。山岳信仰の対象であり、富士山や立山、白山と並んで古くから庶民の信仰を集めました。現在も全国に100万人とも200万人とも称される信者があり、夏季には10万人以上の信者が登拝します。

御嶽山噴火災害とその後

2014年9月27日に起きた御嶽山の噴火では、死者58人、行方不明者5人という戦後最大の火山災害となりました。当時、登山者の救助・捜索は困難を極め、警察、消防、自衛隊など延べ15,000人による19日間に及ぶ捜索活動が行われています。(その後、2015年に長野県による9日間の捜索活動実施)

この噴火災害では、噴火予知とその情報伝達、火山防災に対する意識の欠如という点で課題を残しています。御嶽山を「おやま」として崇め奉り、心の拠り所として生活の糧としてきた私達にも広く影響と課題を残しました。地域に暮らす私達は、犠牲者を悼み、哀悼の意を捧げ続けるとともに、二度と同様の災害が生じぬよう、噴火災害の教訓を後世に伝えていく必要があります。

※ 2022年(令和4)8月、御嶽山ビジターセンターが開所しました。写真や映像により噴火時の様子を伝えるとともに、噴石により壊れた山小屋壁面を展示するなど、木曾を訪れる人達に噴火災害を伝承しています。

御嶽山は一部区画の入山が規制されており、登山前の詳細確認が求められています。

入山規制についての問合せ先:

王滝村役場 総務課/TEL 0264-48-2001

木曾町役場 総務課/TEL 0264-22-3000

■主要参考文献/『木曾—歴史と民俗を訪ねて—』(木曾教育会郷土館部 2010)

『木曾・御岳わすれじの道紀行』(田中博 風媒社 2008)

『木曾のおんたけさん—その歴史と信仰』(菅原壽清ほか 岩田書院 2009)

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

御嶽信仰

御嶽山は霊峰として名高く、神の座す山として古くから信仰の対象となってきました。麓の人にとっては毎日のように見上げる故郷の山であり、開田・三岳・王滝の小・中学校歌には「御嶽」が入っています。

全国各地に御嶽と名のつく山はありますが、「おんたけ」と呼ばれるのは木曾御嶽山だけとされます。

悠然とした山姿から王御嶽座王権現と呼ばれ、その頭がつまって「おんたけ」となり、近世になり木曾御嶽信仰が全国的に拡大されるとともに、これが公称となりました。「山は富士、嶽は御嶽」と呼ばれることもあります。



御嶽山、開山の歴史

御嶽山の開山は諸説あり、702年(大宝2)に信濃の国司・高根道基が開いたと伝わります。1161年(永暦2/応保元)には後白河法皇の勅使が登山参拝をしたと言われ、古くから信仰登山が行われていたことが分かります。当初は修験道場として栄え、平安・鎌倉・室町と時代がくだるにつれて民間信仰として集団登拝する風習が生まれたと考えられています。

当時の登拝可能な山では、富士山に次ぐ名山で、中部日本の山岳が見渡せ、西方遠くには伊勢の海を望むこともできる地理的位置は、神秘的な霊場としての条件を備えていたと言えます。

1784年(天明4)には尾張の行者・覚明かくめいによって黒沢口が開かれ、限られた修験者だけでなく一般の人々も水行を行えば登山できるようになりました。

1794年(寛政6)には武蔵国の行者・普寛ふかんが王滝口登山道を開き、御嶽講による集団登山を指導したため、御嶽信仰は全国的に広まりました。

講(講社)とは、信仰を目的とした民間結社で、御嶽を崇拝し信仰登山を行う御嶽講は、幕末には大小300を超えたとされます。

なお、ふたりが開山した登拝ルートにちなみ、西日本に多い覚明系信者は黒沢口から、関東に多い普寛系信者は王滝口から登拝しています。



御嶽山登山口(田の原)

●御嶽講の登拝

御嶽講では比較的一般の人でも参加しやすい登拝を主催しています。会員への募集だけでなく、地域の神社や寺の貼り紙等でも募集しており、多くは会員でなくとも参加できます。

行程は講によってさまざまですが、多くは7月下旬～8月の盆前に1泊2日から2泊3日で行われます。

ご来光を拝むため、未明に登り始めることが多い（夜の暗闇が死の世界で、朝日を浴びて生の世界に蘇るとされる）。

参加するときの装束は、平服の上に講社の法被をはおり、たすきをかけ、鉢巻を結ぶ程度（講から貸与されることがほとんど）。

一般的な行程は以下のとおり。

- ①各講社の契約旅館に泊まる。
- ②黒沢口・王滝口の里宮に参拝する。
- ③清滝か新滝で行者や有志が水行をする。
- ④七合目の田の原までバスで行き、ここから3時間ほどかけて山頂を目指す。登るときは金剛杖を手に「サング、サング（懺悔懺悔）六根清浄」と声をかけながら歩く。
- ⑤頂上にある奥社を参拝する。時間が許せば三の池に足を伸ばし、あらゆる病やケガに効くという御神水をくむ。
- ⑥下山。往路では緊張した雰囲気があるが、下山後は精進落しとして酒や食事がふるまわれ、なごやかになる。



構成文化財⑬

自然・景勝地／文化

王滝村

木曾町

きそおんたけさんれいじんひぐん

木曾御嶽山霊神碑群

■基本データ

- 場所 木曾御嶽山周辺一帯
- 所在地 木曾郡木曾町・王滝村
- 種類 霊神碑、2万基以上

御嶽山一帯には、2万基を超える石碑があります。これらの石碑群は「^{れいじんひ}霊神碑」と呼ばれるもので、お墓ではありません。御嶽山の山岳信仰において信仰者の^{れいこん}霊魂は死後、御嶽山（おやま）を安住の地とするとされています。

御嶽講の人々により死後魂が御嶽に還るよう願って建てられた石碑群。御嶽信仰では、「御嶽に生まれ御嶽にかえる」との考えから、御嶽のふもとに「^{れいじんひ}霊神碑」を建てて先祖の霊を慰めます。

木曾御嶽本教では碑を造れない信者のため、三岳に「^{それいでん}祖霊殿」を建立し、毎年、慰霊大祭^{さいこう}を齎行しています。

●親しまれた覚明行者

修行の途中、喉が渴いた覚明行者が地元の人に水をたのむと、ぬるい水が出てきた。訳を尋ねたところ、近くに水がないため遠くまで汲みに行っているという。気の毒に思った覚明が錫杖で地面を掘ると水が湧いた。いまでもこの水は「覚明さまの水」と呼ばれ使われている。（上松町池島）

覚明が「アカマツの苗が育てば必ず稲ができる」と村人に教えた。そこで苗を植え、それが育ったところで開田し、村人たちは夢にまで見た白米を食べることができた。感謝した村人たちは西野に「開田の碑」を建てて、覚明の功績をたたえている。（開田西野）

当時、一般信者の御嶽登拝は許可されていなかった。覚明はその取り締まりに屈せず多くの信者をつれて登拝を続け、1786年（天明6）に御嶽山頂の二の池付近で亡くなった。その後も信者たちは登拝をやめず、やがて信者がもたらす経済的利益に気づいた庄屋たちも嘆願に加わり、ついに1792年（寛政4）に一般信者の登拝が許可された。

おんたけじんじゃさとみや

御嶽神社里宮

御嶽神社 里宮(黒沢口)

■基本データ

- 住所 木曽郡木曽町三岳榎山
 アクセス JR「木曽福島駅」から車で約20分、
 伊那ICから45km60分
 連絡先 御嶽神社社務所／TEL 0264-46-3076



マップQR



御嶽神社 里宮(黒沢口)

- 木曽御嶽神社: 黒沢口＝奥里三社
 ー奥社本宮(木曽郡木曽町剣ヶ峰頂上)
 ー里社本社(木曽郡木曽町)
 ー里社若宮(木曽郡木曽町三岳)

御嶽神社 里宮(王滝口)

■基本データ

- 住所 木曽郡王滝村東3315
 アクセス JR「木曽福島駅」から車で約20分、
 伊那ICから45km60分
 連絡先 TEL 0264-48-2660



マップQR



御嶽神社 里宮(王滝口)

- 木曽御嶽神社: 王滝口
 ー奥社本宮・王滝口(長野県木曽郡王滝村御嶽山頂上)
 ー里宮(長野県木曽郡王滝村)

室町時代後期頃から信仰を集め、江戸時代には御嶽山頂に祀られた御嶽山座王大権現の里社として全国にその信仰が広まりました。

御嶽神社の里宮は、嶽麓の黒沢田中に本社(祭神少彦名命)と若宮(祭神大己貴命)があり、王滝上島に里宮(祭神国常立命・少彦名命)があり、ともに御嶽神社と称していますが、江戸時代は黒沢本社、里宮は安気大菩薩ともいい、王滝里宮は王御嶽権現(または岩戸権現)と称していました。

本社には八幡大菩薩(本地阿弥陀如来、脇侍毘沙門天、弁財天)若宮は桶安気大菩薩を祀っており、中世においては御嶽座王権現三十八社のひとつに数えられていたものであり、それぞれ若宮と本社の祭神に配したものです。

両社とも時代ははっきりしませんが木曽氏の創建であるらしい。本社は、1554年(天文23)に木曽義在・義康父子によって再建されたもので、父子の奉納した棟札と鰐口が現存しています。今の社殿は1873年(明治6)関東巴講社により造営されたものです。若宮は、1385年(至徳2/元中2)木曽家親(家信)によって再建されたもので、同氏寄進の鰐口と、1565年(永禄8)木曽義昌等が奉納した三十六歌仙絵馬額とがあり、何れも社宝となっています。

御嶽神社の祭日は、古来6月12・13日でしたが、1872年(明治5)太陽暦採用により、7月18・19日に改められました。

■主要参考文献／「御嶽の信仰と登山の歴史」生駒 勘七

「三岳学校百年誌」三岳小学校百周年記念事業実行委員会

●御嶽信仰の実情について

- ・御嶽神社はもともと地元の神社として室町時代からあり、御嶽山信仰の拠点として建てられたわけではない。
- ・18世紀に覚明や普寛によって登山道が開かれるまでは、御嶽山は庶民が足を踏み入れることの許されない特別な場所だった。
- ・御嶽山で修行を積んだ行者たちが、御嶽山信仰を全国に布教することで、信仰が広まった。
- ・江戸後期になると関東一円から登拝客が集まるようになった。当時は講社を代表する人が皆の分も代拝することが多かったようだ。その後、経済的に豊かになると集団登山が定着した。
- ・近年では高齢化による後継者不足のため講を維持することが難しくなってきたため、それぞれの講が外の人を募って御嶽山にやってくるが増えている。ほとんどの講では宗教や宗派を問わず参加できる。服装や参拝の順序に細かい決まりはない。御嶽神社からそれぞれの講に注文をつけることもしていない。
- ・7合目まで車で行けるので、登拝には多くの人々が参加しやすい。
- ・例年7月末から8月半ばの週末は集団登山客で宿が一杯になるが、平日やそれ以外の季節であればそれほど混雑はない。

（御嶽神社宮司 滝和人氏（第22代）・談）

あこたまる

阿古太丸の伝承

きたしらかわすくえししょうしょうしげより

平安時代、京都に住む公卿・北白川宿衛少将重頼は子どもに恵まれず、御嶽山に祈ったところ男女ふたりの子を授かった。女の子を利生御前、男の子を阿古太丸と名づけたが、母親は病死した。重頼は白萩御前を後妻に迎えたが、この継母と阿古太丸がうまくいかなかった。阿古太丸は奥州の親戚を頼って京より木曾路をたどり、御嶽山に参拝しようとしたとき板敷野で病に倒れ、15歳で亡くなってしまった。

京にいた重頼は、夢枕に立った阿古太丸の後を追ひ、利生御前と旅立ったが、木曾で阿古太丸の死を知った利生御前は墓前で自害してしまう。重頼は、ふたりの霊を御嶽大権現のもとへかえすと、自らも後を追った。

この話を知った天子は重頼父子を御嶽大権現のそばに祀り、信濃の国のすべての国司が御嶽に登って供養をした。いまも木曾福島からただ1箇所、御嶽山が見えるとされる。板敷野の隅には、阿古太丸を伝える小さな塚が残っている。

なお、木曾町には別の言い伝えもある。重頼は利生御前とお供を従えて山頂に向かったが、8合目で御前を見失い、9合目で霧にまかれながらなんとか参拝を果たした。そのとき重頼が扇を落とした場所を扇ヶ森、下山の際に泊まったところを白川といい、後に人々は白川権現社を建てて重頼たちを祀ったという。

さらに玉滝村では、阿古太丸の継母は子供の霊をとむらうために玉滝に身を潜めて生涯を過ごしたとされ、村人たちは阿古太丸の霊を継子岳に、継母の霊を継母岳に祀ってとむらったという伝説が残されている。

御嶽信仰への復帰運動

1869年(明治2)、維新政府の政策で、仏教(宗教)と神道(神社)の混交を禁止し分離する方針によって、御嶽権現の称を廃し、仏体を除いた御嶽神社と、民間信仰団体である講社の2つの信仰形態がとられるようになりました。しかし、戦後、御嶽神社を主体とした本来の御嶽信仰への復帰運動が起こり、登拝を重視する黒沢御嶽神社を中心とする「木曾御嶽本教」ができ、総本庁が黒沢に設置されました。



地蔵峠

史跡
木曾町



長野県木曾郡木曾町新開

御嶽山を眺めるビューポイントです。木曾福島方面から開田高原に向かう途中にあり、展望台が設置されています。

飛騨街道最大の難所であった海拔1,335mの峠道は、1940年(昭和15)までに唐澤滝上

まで完成しましたが世界大戦で中断され、戦後になって車道が完成しました。

地蔵峠一帯の尾根には安山岩の溶岩が露出しており「地蔵峠火山岩類」と呼ばれ、100万年ほど前に西野本谷奥県境にそびえる鎌ヶ峰付近で噴火した時の溶岩といわれています。



御嶽山・古道遊歩

史跡
王滝村



連絡先: 王滝村観光案内所 / TEL 0264-48-2257

「御嶽古道」は歴史が香る山麓の道です。清流のせせらぎを聞きながら日ごとに代わる樹木の色、可憐な山野草、生きものたちに出会う自然の中で心も身体も生き返るよう。御嶽

山麓の変化に富んだ、トレッキングが楽しみな遊歩道です。信仰登山などで歴史的に歩かれてきた道を軸として、トレッキングが楽しめる6つの遊歩道コースが整備されています。

きよたき しんたき
清滝²⁰ 新滝²¹

■基本データ

- 住所 木曽郡王滝村
- アクセス JR「木曽福島駅」から車で約50分
- 連絡先 王滝村観光案内所／TEL 0264-48-2257

里宮から御嶽山へ向かう道を辿り、三合目に現れるのが「清滝」と「新滝」です。

江戸時代、水行だけの軽精進でも御嶽登拝ができるようになり、庶民の信仰も集め、木曽谷を訪れる人を増加させました。



清滝

深い森を背景に宿す荘厳な谷合から轟音をとどろかせる「清滝」は、古くから御嶽山を信望する行者が御山に登拝する際に必要とされる100日間の精進潔斎する行場でした。

車道からも姿が望める滝で、往時から信者が最も滝行を行った滝であり、清滝不動明王、清滝弁財天が祀られています。

滝の高さは約30m、水量も豊富で、真冬には氷柱が出現しさらに荘厳な赴きを魅せます。



新滝の裏側



冬の清滝



新滝

「新滝」は「清滝」から尾根一つ越した深い森の中にあり、いまなお御嶽開山当時の雰囲気を残しています。

流れ落ちる滝の裏側に小さな岩祠があり、新滝不動明王、八大龍王が祀られ、修行全国から集う行者が岩窟に籠り、御嶽山登拝の前に必ず心身を清め、修行した神聖な場所です。かたわらには行者のこもる洞窟、長期修行のための行小屋もあります。

冬になると滝の流れが繊細な氷柱となって、一層神秘的な表情に変わります。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曽路

第2章
江戸時代以前の
木曽の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教（御嶽山信仰）

第7章
その他
（観光宣伝など）

ひやくそうがんそのひ

百草元祖の碑

■基本データ

- 住所 木曽郡王滝村此の島100-1
- アクセス JR「木曽福島駅」からバスで約40分
伊那ICから車で約60分
- 連絡先 王滝村観光案内所／TEL 0264-48-2257
長野県製薬株式会社／TEL 0264-46-3003

昔、百草の伝承は全て口伝でした。しかし記録は必要だと村人が計らい、どうい経緯で伝わってきたのかをしっかりと残すために作られたのが「百草元祖の碑」です。

元は御嶽神社旧参道にあったものを長野県製薬株式会社敷地内に移築されました。

百草元祖の碑には嘉永2年(1849)、胡桃澤弥七と小谷文七が普寛行者の遺法(過去から現代に引き継がれている法)を共に謀りて“百草”を作るに始まる」と記されています。



百草元祖の碑の拓本



昔の百草は竹の皮に包まれていたそうです



百草本舗の額

■長野県製薬株式会社
御岳百草丸薬製部／小谷宗司さん



「百草」は、三岳黒沢口を開いた尾張の行者・覚明と、王滝口を開いた武蔵国の行者・普寛によって伝授されたといわれ、御嶽信仰の普及とともに、「御神薬」として行者たちによって全国の信者に配布されるようになったと伝えられています。

御嶽山で採れるキハダの内皮(黄柏:オウバク)から抽出されたエキスが「百草」で、オウバクは苦味健胃薬で消化を助け、胃腸の調子を整えるとともに食べ過ぎ、飲みすぎ、胃のもたれ、食あたり、眼病、捻挫、打撲など様々な症状に用いられ、人々はこれを「百種類の薬草を使ったと同じくらいの効果がある」あるいは「百の病を治す万能薬」として貴び、「百草」と名付けたともいわれています。

現在では御嶽山に生息する数多くの薬草を調査し、さまざまな伝承薬が作られています。

百草丸の販売と工場見学

長野県製薬株式会社
および
日野製薬株式会社
では
製造工程の工場見学
が可能です。



*工場見学はそれぞれの製薬会社様にお確かめください。
また、木曽郡内の各お土産店などで百草を販売しています。